

読書が“人生の扉”を開く

「子供時代の本は“人生の扉”になる」。先週、『致知』という月刊誌を読んでいて、この言葉に出会いました。この言葉に共感できる人はどれくらいいるでしょうか。今の私は、この言葉に共感できます。たくさん本を読んだからです。もし、今何をやってもうまくいってなかったり、目標に向かって行動できなかったり、自分のことが嫌になったり…と感じている人がいたら、本を読んでみてはいかががでしょうか。人生が変わるかもしれません。少なくとも私はそうでした。

文部科学省の調査によると、日本人の年間の読書量は12.3冊です。1年は12か月なので、1か月に1冊です。さらに、文化庁の「国語に関する世論調査(2018年度)」において、「1か月に大体何冊くらい本を読んでいるか(雑誌や漫画を除く)」という質問に対しては、本を1冊も読まないと回答した人が、全体の47.3%もいます。驚きです。ちなみに、月に1~2冊は37.6%、3~4冊が8.6%、5~6冊が3.2%と続き、7冊以上は3.2%です。もし、あなたが月に7冊以上本を読んでいるとしたら、日本人の上位3%に入っているということです。それくらい本を読めば、人生変わって当然だと思いますか。理由は簡単です。日本人の9割以上の人がやっていないことを成し遂げるということです。

本を通して、いろいろな人に出会ってほしい、いろいろな考え方を知ってほしいという思いで、この学級通心でも本の一部を紹介するようになりました。懐かしの“岡本文庫”もこの思いがあったからです。本との出会いは「人との出会い」です。勉強や部活で忙しい、放課後も塾が…そういう生活に慣れると、出会いの幅が狭まっていきます。だからせめて、本を通して、いろいろな人に出会ってみると、自分の知らない世界があることを知ったり、今の自分を突き動かしてくれるヒントを得られりするかもしれません。

煙の向こうの世界の話。光輝く世界の話。

さて、本は本でも今日は「絵本」です。2020年の12月、コロナ禍真っ只中に上映された映画があります。『映画 えんとつ町のプペル』をご存知でしょうか。これは、キングコング西野亮廣さんが描いた絵本が原作です。この映画のストーリーはこうです。

厚い煙に覆われた“えんとつ町”では、煙の向こうに「星」があるとは誰も想像すらしませんでした。一年前、この町でただ一人、紙芝居に託して「星」を語っていたブルーノが突然消えます。ブルーノの息子であるルビッチは、学校を辞めてえんとつ掃除屋として家計を助けます。しかし、その後も父の教えを守り、「星」があると信じ続けたルビッチは、町の皆に嘘つきと後ろ指をさされ、ひとりぼっちになってしまいます。

そしてハロウィン之夜、彼の前に奇跡が起きます。ゴミから生まれたゴミ人間・プペルが現れ、のけもの同士、友達となります。そんなある日、巨大なゴミの怪物が海から浮かび上がります。それは父の紙芝居に出てきた、閉ざされたこの世界には存在しないはずの“船”でした。父の話に確信を得たルビッチは、プペルと「星を見つけに行こう」と決意します。しかしこの町の治安を守る異端審問官が二人の計画を阻止するために立ちはだかります。それでも父を信じて、互いを信じ合って飛び出した二人は、大冒険の先に、驚きの秘密を目の当たりにします。

えんとつ町はえんとつだらけ。そこかしこから煙が上がり、頭の上はもっくもく。黒い煙でもっくもく。朝から晩までもっくもく。えんとつ町に住む人は、黒い煙に閉じ込められて、青い空を知りやしない。輝く星を知りやしない。

見上げることを捨てた町で、一人の男が上を見た。町を覆った黒い煙に、男が思いを馳せたのは、酒場で出会ったおしゃべりもぐらが、聞かせてくれた夢物語。煙の向こうの世界の話。光輝く世界の話。

ありやしないと思ったが、まったくないとも言い切れない。なぜならだれも行っていない。答えはだれももっていない。

それから男は日ごと夜ごと、煙の向こうの世界の話、何度も何度も叫んだが、バカだバカだとはやされて、ほら吹き者だと切り捨てられた。男が一体何をした。男が誰を傷つけた。そこに理由はありやしない。

見上げることを捨てた町では、目立たぬようにの大合唱。

見上げることを捨てた町では、夢を語れば笑われて、行動すればたたかれる。

黒い煙は町を飲み込み、一縷(いちる)の光も許さない。黒い煙は人を飲み込み、あらゆる勇気を認めない。それでも男は声を上げ、震える膝をひた隠し、船に乗り込み、海に出た。暗くて怖い海に出た。誰もいない海に出た。誰もいない海に出た。

煙の向こうの世界の話。光輝く世界の話。

ありやしないと思ったが、まったくないとも言い切れない。なぜならだれも行っていない。答えはだれももっていない。

己の眼(まなこ)で見る前に、答えを出してなるものか。煙に飲まれてなるものか。

ひと波超えて、ふた波超えて、嵐に襲われ、不安に襲われ、帰る港もありやしねえ。頼る仲間もいやしねえ。気がつきや船底穴ぼこだらけ。漕ぐ手を止めると沈んでしまう。浮くのがやっとなのおんぼろ船。ずいぶん前から進んじやいない。

ここで終わってなるものか。ここで終わってなるものか。ここで終わってなるものか。男は勇気を振り絞り、積み荷のひもをふりほどき、できない理由を海に捨て、言い訳御託を海に捨て、ほんのわずかな食料とたしかかな覚悟だけを残し、再び波に立ち向かう。…後略…

『映画 えんとつ町のプペル』より

「不易と流行」という言葉がある通り、変えてはいけないことは必ずあります。不安定で変化が激しい時代だからこそ、変化を恐れる人は多いです。挑戦が大きければ大きいほど、実現できない確率が上がるのも当然です。でも、挑戦する人を笑ったり、夢を語る人を笑ったり、行動する人を叩くことから生まれるものなど何もありません。余命宣告された人たちが人生を振り返って後悔していることで、圧倒的に最も多いのは「もっと挑戦しておけばよかった」だそうです。